

First International Recreation Congress に参加した日本人代表 3 人の発表

西野 仁 (東海大学)

はじめに

1932 年、米国ロスアンゼルスにおいて、アメリカレクリエーション協会が主催し First International Recreation Congress が開催された。この会議は、「第一回国際厚生会議」(名古屋市、1940、p.210)、「第一回国際厚生運動大会」(興亜厚生大会事務局、1941、p.1)、「第一回レクリエーションならびに余暇に関する世界会議」(文部省、1952、p.11)、「第一回世界レクリエーション会議」(文部省、1953、p.15) などと日本語訳はさまざまである。会議は、National Recreation Association が主催し、7 月 23 日から 29 日まで開かれ、25 カ国にハワイとフィリピンを加えた外国から 101 名の代表が参加、国内 33 州とワシントン DC から 595 名の代表が参加した。(1933、National Recreation Association、p.12)。日本からは、11 名の日本人が参加し、岸清一 (日本体育協会会長)、大谷武一 (体育研究所長)、斉藤惣一 (日本 YMCA 同盟総主事) の 3 名が発表した。本研究は、3 名の日本人がどのような内容の発表を行ったのかを、会議の proceedings をもとに、紹介・考察したものである。

岸 清一博士の General Sessions における講演 Recreation in Japan 要旨

日本では、西洋流のレクリエーションやプレイグラウンドの領域は、大規模に行われていない。日本には、「Sumo 相撲」と呼ばれる一種のレスリングがある。300 年くらい前からは職業相撲が盛んになったが、2000 年もの長期間、「相撲」はアマチュアでレクリエーションとして盛んに行われてきた。大きな室内闘技場で二人の巨人が相対する定期的な相撲トーナメントは、職業娯楽である。他に「Judo 柔道」「Jiu Jitsu 柔術」「Gekken 撃剣」も古くから行われている競技やレクリエーション的活動である。それらは「Samurai 侍」の教育や訓練の一部として行われてきたが、今日では、中学校や高等学校で、男子の体育科目として行われている。

西洋から紹介されたスポーツやレクリエーションについては、野球が帝国大学や早稲田大学などの大学生の間で急速に広まっており、国技の様相を呈している。漕艇も同様に、大学対抗レガッタも開催されている。陸上競技やローンテニスも盛んになってきており、デビスカップに選手を派遣している。

日本がはじめて国際オリンピック大会に参加したのは、1912 年ストックホルムで開かれた第 5 回大会である。1924 年のパリ大会で織田選手が三段跳びで 6 位入賞し、4 年後のアムステルダム大会で第 1 位になっている。以前は横泳ぎが主流だった水泳もクロールなど近代泳法を学び、アムステルダム大会では、イングランドを破るまでに発展している。しかし、まだ、水泳プールが不足しており、数年前までは、東京 YMCA にあるだけであった。その後東京 YWCA と私立大学にプールが建設されている。二年前には、明治神宮外苑に出来た屋外プールで、極東選手権大会を開催したことを誇りに思っている。この 12,000 の客席を持つプールは今日では、おそらく世界

で最もきれいなプールであろう。1923年の地震以来、東京の学校には、25メートルプールが建設され、体育のプログラムに使われている。

公共のプレイグラウンドも地震後整備されているが、多くの場合、コミュニティレクリエーションやプレイセンターの役割は、神社や教会の庭が担っている。東京には80の公園があるが、そのうちの53は過去5年以内に造られた。これらの公園がプレイやレクリエーションの場となっている。訓練されたスーパーバイザーが常駐するプレイグラウンドはたった一つであるが、全てのプレイグラウンドで管理が行われている。しかしいくつかの体育訓練学校が、それにそった授業を展開し始めており、学校教育の新しい段階に合う人材と、適当な競技やレクリエーションの用具が小学校と中学校に置かれている。これは、60年前に紹介され、学校で共通に見られたそれまで肩苦しい古いスウェーデン体操とは対照的である。

非常に広く楽しまれている競技である、バスケットボールやバレーボールの普及はYMCAのアメリカ人の体育ディレクターたちに負うところが大きい。日本は合衆国から手伝ってもらいながらこの発展を加速し続ける必要がある。日本の社会はどんなにか、欧米からの競技やレクリエーションによって生活全体が深く影響を受けている。日本語にはあてはまる言葉が見つからない多くのスポーツ用語が、ごく普通に若者たちは使っている。二年前の視察中、日本の片田舎で、“home run”, “strike”, “foul”などをそのまま、大声で叫びながら野球をしていた日本人の少年たちに、「どこで英語をならったのか」と問うたところ、「英語は話していない」との答えが返ってきた。

この会議で、合衆国はじめ、諸外国の代表と接触し、多くを学び日本に持ち帰りたい。そして、日本レクリエーション協会を組織し、アメリカ合衆国がやっているようにより実効のあるものにして行きたい。

大谷武一の Use of School Facilities for Recreation Section Meeting における発表要旨

遊びには十分な空間の確保が絶対条件である。現在、日本では、主にお寺や放課後の学校校庭がレクリエーションの場を提供している。最大の問題は指導者である。教育関係者たちを安心させてくれるような指導者の育成は、今のところほとんど不可能である。しかし、10年後には状況が変わっていると信じている。

日本の学校では、体育は一部の高等教育機関を除き必修であり、Judo や Gekken が取り入れられている。加えて、ボランティア団体で、ゲームやスポーツが行われている。中でも、ドッチボールは小学校で盛んである。円陣で行われたり四角いコートで行われたりするが、きちんとしたルールを定めている。バスケットボールは主として男子生徒に、またバレーボールは女子生徒によって行われている。テニスは中・高等学校で行われている。ハードボールを打ち合うテニスも行われているが、多くの学校ではソフトボールが使われている。バックネットも要らず、この方が、費用もかからない。

アメリカで国技と言われるほどの野球だが、日本の方がより人気が高いかもしれない。日本の学生は野球狂である。小学校などでは軟らかいゴムの球が使われており、学内で学生と教員たちがチームをつくり、ゲームを楽しんでいる。私のための今回の送別会も野球だったし、帰国後の

歓迎会も野球だろうと思う。観るためより、多くの者が参加できることに重きが置かれている。

長い歴史を持つサッカーとラグビーも大学で行われているが、アメリカンフットボールは紹介されていない。しかし、間もなくこれも盛んになるだろう。

海に囲まれている日本では、水泳が盛んである。海岸、湖、川は、夏の間、大いに賑わう。泳法の完成度や遠泳が大切にされてきたが、最近は学校に水泳プールが次々に建設されている。

スキーやスケートが、近年急に、若い人たちの間で人気が出てきた。寒冷地の少年たちはそれらが出来るが、温暖な地方の人にとっては、適地までの旅費を捻出せねばならない。

陸上競技の進歩も著しい。国際オリンピックの陸上競技出場者のほとんどが大学生であることは興味深い。

遠足やピクニックも学校でよく行われている。もちろん、本来教育目的で行われるが、多くのレクリエーション的価値を持っている。小学校の4・5年生が歩ける範囲の名所や重要な場所を訪れる。これらを通じて、若者たちは何らかの身体的にも、心理的にも、精神的にも役立つものを得ている。

つい最近までは純粋なスウェーデン体操が主流であったが、一種の教育体操が注目されている。機械体操がだんだん広がってきて、オリンピックに初めて、体操チームを送るまでになってきた。

多くの少年が参加する競技やレクリエーション的活動は Judo, Jiu-Jitsu, Gekken である。もともと、自己防衛のためであったが、近年は楽しみのためへと変わってきた。

競技スポーツは代表チーム間の競技会に主眼があり、学内のスポーツ競技やレクリエーションの発展を狙っている。教育的観点からすれば、単なる競技の観客ではなく、できるだけ多くの人が実際に参加することのできるスポーツやレクリエーションを求めている。われわれはみんなのスポーツ **sports for all** を発展させたい。これがわれわれの目標である。放課後の校庭開放や指導者を養成し、成人たちがもっともっと遊びやレクリエーションの価値や質がわかるようにしていくことが望まれている。

斉藤惣一の Recreation in Religious Group における発表要旨

日本の遊びやレクリエーションを考える時、天照大神の神話を思い出す。岩屋に隠れた大神の前で、多くの位の低い男女の神々が歌い踊り、それにつられて大神が岩屋から出てきて世の中が明るくなった。その時、大神が発した言葉が **attractive** あるいは **interesting** を意味する “**omoshiroshi**” であったという。

この物語は、(1) 女性の尊敬 (2) 大衆遊戯 (3) レクリエーションについて示唆している。日本には、大きく神道、仏教、キリスト教の3つの宗教がある。初期の神道の儀式や祝祭では、踊り、音楽、弓、相撲、剣術などが行われていた。これらは人々のレクリエーションでもあり、それらの潔白さは、スポーツマンシップに相通じる。

仏教は本来もっと禁欲的であり、たぶん神道のような陽気さはないのだが、日本仏教は本来の仏教の考え方とはきわだって異なっている。祭りで老若男女は陽気にはしゃぎ、歌い、踊る。また寺はコミュニティーの遊び場でありレクリエーションセンターになっている。高名な

僧 ”Ryokan “良寛は子供たちと寺で一緒によく遊んだと伝えられている。

日本でのキリスト教について述べよう。日本のキリスト教会は、遊びやレクリエーションの精神の紹介に大きな役割を果たしたとは言えないが、アメリカ人宣教師たちの個人的リーダーシップや熱心さは、野球やその他のスポーツやレクリエーション普及の重要な要素となっている。

YMCAとYWCAがどんなにかレクリエーションに貢献したかを述べることができてうれしい。東京YMCAは、日本初のそして長期にわたって近代的な体育の中心であった。F.H.Brown氏のもとで、バスケットボールやバレーボールや体操レクリエーションなどが発展した。地震後の復興で、多くの学校はYMCAのデザインを参考に体育施設を建てた。永い間、YMCAの水泳プールは、日本で唯一のプールであった。

中略

YWCAの貢献も同様に重要であり、特に女性のスポーツ競技やフォークダンスや野外劇などの発達に関係している。

まとめ

1932年ロスアンゼルスで開催されたFirst International Recreation Congressに参加した日本人代表の発表は、当時の状況をできるだけ網羅しようとの意図が伺える。

岸清一は、相撲の紹介からはじめ、欧米から移入された野球、漕艇、テニスなどが大学生を中心に普及していること、しかし、水泳プールなど施設が整っていないこと、公園やプレイグラウンドの建設に着手したが、管理や指導を担う人材が整っていないこと、片田舎でもスポーツ用語が英語のまま使われていることなどを語っている。最後に、アメリカから多くを学び日本にレクリエーション協会を組織したいと宣言している。

大谷武一は、学校施設に絞って発表している。日本で誕生した軟球にテニスや野球を紹介し、遠足にも触れ、参加するスポーツの必要性を強調した。また、sports for allという言葉を手紙に使っていたことも特筆される。

斉藤惣一の発表は、神道、仏教、キリスト教それぞれが、レクリエーションとどうかかわったかを簡潔に解説している。YMCA,YWCAが日本の体育・レクリエーションへ貢献したと述べている。

文献

National Recreation Association, 1933, First International Recreation Congress PROCEEDINGS

名古屋市、1940、第二回日本厚生大会大会誌

興亜厚生大会事務局、1941、興亜厚生大会誌

文部省、1952、職場のレクリエーション

文部省、1953、青年の体育・レクリエーション指導の手引き